

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第160号（2019年9月）

ヒロ爺 ふるさとの風に戯れて

一行に眩く（2）

白井啓治

言葉を考えなくなった時、詩がうまれる。

言葉を考えると説明が顔を出す。

言葉は、真実は伝えない。言葉が伝えるのは事実だけ。真実とは事実と事実の隙間にひっそりと隠れてある。言葉で真実を伝えようとするな。真実を心に籠めて、確かな事実の言葉を紡いでいった時、言葉と言葉の隙間から真実が顔を出す。

言葉で真実を伝えようとすればするほど真実は遠ざかっていく。

あの年の夏も暑かった。

もう限界だと思った。

限界の夏に止めを刺したのが広島、そして長崎。

やっと終焉が来た。

そして絶望の中に希望を見ることができた。

葉津ちゃん 2002年9月4日没

耳ちゃん 2002年10月4日保護

ボーイ 2002年11月20日生く05年8月没

愛々ちゃん 2011年5月保護

人生は（生の世は）はかないもの

だから己の人生は精一杯に生きなければ、はかなさが一層はかないものになってしまう

生滅に煩わされるな

我欲に溺れるな

心の愉快にこそ希望がある

人の世はしばし旅居の仮枕

仮の枕に欲の積みども

明日の希望のあるでなし

耳ちゃん、頑張るな

ゆっくり静かに天命の生きろ

（耳ちゃん2015年9月4日没）

・秋の虫が声する 時のいそいで使うなと

・風の声聞いて時の移ろいを愉しむ

・移ろう時に身を任せ今日の命を愉しむ

・移ろう時に生もなく滅びもなく愉快をおもう

・希望を愉しむは裡にありと風のいう

・野分を感じて寒蟬も天命の覚悟を知る

・移ろう時に身を任せ今日の命を愉しむ

8月の中旬からお猫様の「耳ちゃん」軽い熱中症にかかり点滴を数回打ったが、20日過ぎに容体が急変。検査すると肝機能、腎機能が不全状態。高齢なので最期を迎えるかなと覚悟する。点滴を続けるが、容体の変化なし。病院へ連れて行くのも辛そうなので、延命処置を止める。

静に寝かせていると、苦しむ様子もないので、経

口保水液をスポイトで与えながら自然に任せている。お猫様に分かるわけのないだろうが、「頑張らなくていいよ、静に時を愉しみな」と声をかけ、自分自身に納得を与える。

・耳ちゃんがボーイになった

・耳ちゃん吾がのど仏をチューチュー

・ボーイの花赤く咲け 七重八重

・秋雨のつめたく床下に鳴く蟋蟀の淋しく

・虫の声にのって とどけ思いの心

・九月の風にのってボーイは天に昇って

「鶏口となるも牛後となる勿れ」

先を見ようとしなくてただただ流れに押されて怠惰している今こそ思い出していい言葉ではないだろうか。

芸術とは、対立する価値観を共存させ、真の自由を探せる手段である。

自然とは何でもあるの言う。規則性があるようで規則性なんてない。規則性を求めて生きているのは、何でもありの自然の恐怖の中で、少しでも安心を得たいと想像した神の存在と同じだといえる。

地球上で規則性を求めているのは高等と言われる生物だけである。下等とみなされる細菌などには規則性を求める活動はない。あくまでもファジィといえる。

（本稿は故白井啓治氏が遺された遺稿より抜粋しています。氏は本年6月28日に逝去されました。九月は師の誕生月、75歳となるはずでした。）

色覚異常か？

菅原茂美

日頃使い慣れている言葉にも、全く異常なものがある。それは、日本人はなぜ緑色を「青」と表現するのであろうか。

例えば交通信号機。「赤」「青」「黄」と表現する。赤と黄色はそれでよろしいが、なぜ緑は「あお」と表現するのであろうか、信号機は必ず赤・黄・緑であるが、緑は全国一律。「緑」は「緑」と表現したらよさそうなものだ。信号機は世界共通で、私も自動車国際運転免許証を持っているが、緑は緑。青ではない。

私は文学がいけないと思う。「青一面の新緑の季節」などの表現は外国人には真に煩わしいと思われる。ゴルフデンウイークも終わり田んぼ一面に青い苗が寒そうに震えている。などと表現している。青と緑は完全に別物ではないのか？ 他にも、青二才とか、青い尻とか、黒い馬を「青」という。青臭い二十歳そこそこのアンチャンなどと表現する。こんな些事をとがめているようでは文学の素養も何もあつたもんじゃやない、と叱られるかもしれないが、あやふやな表現よりも、明確な、はっきりした表現が良いのではないのか。文学に疎い私など、あやふやな表現が文学的で優れているとは到底思わない。いつかは青と緑についてクレームをつけようと思っていたが、ああこれですつきりした。

次ぎに色覚異常と思うのは『♪ 真っ赤に燃える太陽だから…』という歌の文句があるが、いくら飛躍した歌の文句にしる、太陽は沈むとき、オレンジ色ではあるが、決して真っ赤ではない。火災の報道で赤赤燃える炎等いくら文学的表現とはいえ、火災の炎は決して真っ赤ではない。それに

近いけれど赤ではない。正しくはオレンジ色かと思う。日本語のあやふやさを避けるために報道機関は正しい言葉遣いをするべきではなからうか。

更に不思議なのは、真っ赤な嘘、純白な正義感など善悪に色を付けて強調するが、これは物理的なものではないから、私は文句を言わない。カワセミの翡翠は、雄を翡（赤っぽい）、メスを翠（緑っぽい）というそう。5月の誕生石で、金やダイヤモンドよりも高価なのだそう。鉱物学的説明は難しすぎて何が何だかさっぱりわからん。ただ私が言いたいのは文学的な色付けはどうでも良いが、物理学的色付けは、明確な方が良いのではないかと言いたい。

次に日本人は、外国人と話すときに、はっきり物事を言いきらず、何となく、あやふやな物言いで片を付ける傾向がある。私が中米で仕事をしていた時、通訳に何度か注意されたことは、どちらとも取れる物言いをするものだから、通訳も困った様子で、私に、注意をしてきた。相手はスペイン語の国であつたが、いわばそれぞれ国と国とを代表する者同士の会談であるから、明確な言葉で、はっきり区切りをつけた話をすべきである。

1997年の事であつたが、パソコンがはやり始めた頃、通訳は私が話した言葉と、相手がスペイン語で話した内容を、会談中に通訳をしながら印刷し、会談が終わるとほぼ同時に、印刷物を両者に渡し、これで良いかと確かめる。このスピードに私は目を白黒して驚いた。通訳は日本人であつたが、こんな優れた人がいるのかと驚かされた経験がある。日本人同士、日頃なれ合っているから、多少のあやふやな話でも結構通じ合い、さしたるトラブルもないが、はっきりものは言うべきものと、しみじみ感じている。

通訳の雇用時給は2時間2万円。かの国では1か月2万円あれば、家族が暮らせる。定年退職後は、私はこの国で暮らしたいと思っていたが、治安と衛生がね!! なにしろ誰でも拳銃を持っているし、水道水の滅菌が不十分。私はあらゆる面で買い水を使っていたが、シャワーだけは信用して普通の水道水を使っていたら「アメーバ赤痢」にやられ、3日で7kg体重が減った。幸い現地の医者を手馴れた優れた医者で直ちに正確な診断をしてくれ、1週間ですっかり治った。感謝感激。もしあの時のあの医者が、ゴジャッペだったら私は生きて帰れなかった。国は十分あり得る事なので、5000万円（自衛隊も同じ）の生命保険をかけていてくれた。それが生きてノコノコ帰ってきたもんだから、女房のやつ、かなり、がっかりしたことだろう。

さて現地人雇用のお話であるが、何しろ奥さんが、掃除・洗濯・お勝手などをやろうものなら、あの日本人はケチンボの悪党だ!と言われる。当然現地人を雇うべきとする。ところが同僚に単身赴任の日本人がいたが、冷蔵庫にいろいろ買い置きをしまつておいたがその中身はある日、雇った家政婦が、友達を呼んで全部料理して食べてしまった。ビールなど一本も残っていない。豊かな者は貧しい者に分け与えるのが当然の義務。という話であるらしい。世の中、思うようにはいかない。



寒 蟬

白井啓治

『真赤な紫陽花に心奪われて恋の降る里』

深紅の、いや芳醇な赤ワインの深みを持ったピロードのような赤い紫陽花のある事を初めて知った。霧雨の中に咲くそれを見た時の衝撃は、この紫陽花は恋の降る里にしか咲かない紅の色だと思っってしまった。

それは、覚悟をつくって一直線に傾斜してくる女性と出会った時に感じた衝撃と同じものであった。それで直ぐにこの深紅の紫陽花は恋の降る里に咲く花に違いないと思ったのである。そのとき若し側に女性がいたら、衝撃で見境なくなり、激しい恋に落ちたかもしれない。

さて、ことば座の朗読舞の脚本に書いたものから寒蟬（かんせん）を紹介したいと思う。寒蟬とは、季節外れの秋も深まってきた時期に啼く蟬の事であるが、一生懸命に雌を求めて啼いてもすでに雌は居ないという寂しい雄蟬の事である。この詩は単に恋人の振りむいてくれない悲しさを歌ったものだけではなく、逼塞するふるさとに対する警鐘になればと言う思いも込めて詠んだものである。

この詩は、公演「里子・大地の舞」に挿入した舞歌でもある。

“寒蟬（かんせん）”

この里山にはもうあなたはいないのですか
私の言葉があなたの心に届いて

あなたが私の言葉に応えて
あなたの言葉を木霊に返してくださるまで
私はあと幾度声に啼けばいいのですか

もし、私の声に啼く数の知れたら

私はこんなに苦しむことはありません

私はもうじゅうぶん過ぎるほどあなたに私の声
を啼いています

でも未だじゅうぶんではないのですね

私の啼く言葉の力が未だ足りないのですね

それとも、

この里山にはもうあなたはいないのですか
もうすぐ、もうまもなく私の声は涙とともに枯
れてしまうでしょう

あなたの谷水を汲むこともなく

寒蟬はあなたの恋をもとめて

啼くことだけが定めなのです

この里山にはもうあなたはいないのですか

私はこのまま恋を求めて

言葉に啼いて終わるのです

今夜、秋風が吹いたら

あなたの谷水を汲むこともなく死暮れて

そして枯葉に腐して土に溶けて

わたしは無くなってしまうのです

寒蟬はあなたがもういないと自覚しても

死ぬまで啼きつづけて終えるのです

“風の声”

何時も呼んでいるのに

なぜ聞こえないふりをするのですか。

あなたがきつとわかる様にと

私の言葉を文字にも書いて風に声しているのに

あなたは何時も聞こえないふりをしてしまう。

それは私の事を嫌いだという事ですか。

かまいませんよ。

あなたに嫌われても私はあなたを呼び続けます。

そして、

私の呼ぶ声を風に運んでもらいますから

（ひろち）

（あとがき）

「寒蟬」はヒグラシとも読む方もおられるだろうが、「かんせん」と読む。これも氏が2009年にことば座公演「里子・大地の舞」に挿入した詩である。

また、「風の声」は私が始めたブログ（まほらにふく風に乗って）の1周年（2011年8月）に白井啓治さんから送られた詩である。その添え書きに

「ブログの添付写真を見ていてふとこの詩が口を
ついて出た。」と書かれていた。2011年は東日本
大震災もあり、ブログも中断の憂き目にあいそ
うになったが、なんとか欠かさずに継続できた思
い深い時でもあった。

この後、この詩を糧に6年以上休むことなく意
地になって書き続けた。しかしここ2年ほど更新
が飛び飛びになってしまっている少し反省だ。
それでも累計3千回を超えた。またブログのペー
ジビュー回数は70万回を越えている。これからも
氏の言葉を時々思い出して100万回を超える
までは頑張っていきたいと思う。

この「ふるさと 風」も大黒柱が亡くなりなり、
各所から会報の継続を心配する声が寄せられてい
るが……

分かれ道 さてどっちへ行く

(記 木村 進)



地域に眠る埋もれた歴史(53) 木村 進

【石岡市内の社寺紹介】

・金刀比羅神社（ことひらじんじや）

この神社は平安時代の中ごろに平高望王が
国府に着任して以来、平氏ゆかりの神社とし
て伝承されるようになりました。金刀比羅神
社のある地名の古称が「森」「森木」「守木」
であり、この言葉が神社・神木・神垣の意を
あらわしていたと言われています。また、こ
の森が平氏の「森木殿」と称され、「大森大明
神」を祀り、歴代の平氏の子女が祭主となっ
て神役に勤仕していたとも伝えられます。

また、茨城廃寺や外城などがあつたカンド
リ地区に鎮座していた「香取神社」を戦国時
代末期に現在の金刀比羅神社（森木殿）境内
に遷座して、経津主神を大物主神、崇徳天皇
とともに祀っています。



江戸時代、石岡の町（府中平村）が浜街道
としてにぎわっていた当時は、海の守り神と
して銚子より平潟へかけて海浜の方々の崇敬
による講中などで賑わいました。

明治以降も「笠間の稲荷か、石岡の金刀比羅
さまか」といわれ、毎月10日は「月の10日は
こんぴら様よ、さあさ行きましよ、お祭りに」
とかなりの人が集まったといえます。

今でも毎年1月と10月の各10日に大祭が行
われています。これも恐らく霞ヶ浦の水運が
発達していた時には、これらの関係者もたく
さんお参りに来ていたものと推察されます。

神社は数年前に火災で焼けて、再建されまし
た。また東日本大震災で、入口にある大きな
鳥居にヒビが入り修復し、境内横にあつた土
蔵は取り壊されてしまいました。

この高さ10m程もある大鳥居は大正4年に
大正天皇の即位を記念して笠間市稲田の花崗
岩で建てられたものです。

この鳥居の位置に昔は、立派な楼門（三層）
が建っていたそうですが、明治11年の火事で
焼けてしまいました。この楼門（二天門）は
その昔、神官が法螺貝を朝晩に吹いたので法
螺堂とも呼ばれていました。

本殿も焼けて再建され、また昭和4年の大火
事で焼け、昭和5年に伊勢大神宮古殿舎の御
賜材を使い再建されたが、平成12年にまた火
災で焼失。今の本殿（拝殿）は平成19年のも
のです。

また、この神社に関係した寺が二つ（森木寺
と八大寺）あつたそうですが、これらは府中
城の大掾氏の滅んだ天正18年（1590）に一緒

に焼けて無くなっていました。

でも前から森木と呼ばれていたこの神社や寺の名前が「守木」として地名に残りました。

新社殿は、木曾桧を使い、屋根の重厚な曲線や木彫りの彫刻、はめ込まれた彫金の上には金箔が施されました。

また境内には地元有志の方たちにより正岡子規の句碑が建てられました。

正岡子規が学生であった頃に水戸の学友を訪ねて水戸街道を水戸まで徒歩で歩いた。江戸を出て藤代に泊まるが雨も降って4月ではあったが寒さもありこの時の無理がたたって病に倒れたともいわれています。

旅の初日の宿（藤代）は気持ちもよくなく、2日目には土浦を通り霞ヶ浦が見たいと思っていたが街道筋では見えなかったので高台にあった真鍋公園に登った。そして、そこからの眺めに大いに喜んだという。

この真鍋公園は6号国道の建設の際に削られて消えてしまい、現在は真延寺の階段を登った寺の前に句碑が建てられています。

子規は土浦を過ぎてようやく雨も上がり石岡まで足を延ばして「万屋」という宿屋に泊まった。この宿のもてなしが気に入って「万屋は石岡一等の宿」だと「水戸紀行」に記しています。その時に石岡周辺では次の2つの句を詠んでいます。

○「二日路は筑波にそふて日ぞ長き」（今回の句碑）

○「白雲の蒲團の中につままれてならんで寐たり女體男體」

・ 宮部不動院

石岡の宮部地区にある不動院である。かつて江戸時代には府中でも中心的な寺の一つであったという。真言宗智山派 明王山虚空蔵寺不動院という。本尊は行基の作といわれる不動明王となっている。また後光明天皇の宸翰（書簡）が納められている。この寺院の裏手は大掾氏が築いた府中城の本丸に近い。1590年に佐竹氏によって大掾氏が滅ぼされた時に、城と共に焼けたため、この寺の創建も記録は定かではない。鈴ヶ池のあった窪地は、現在住宅が立ち並んでいるが、そこから不動院は一段登った高台にある。不動院は天正年間（1573-1592）に佐竹氏が府中城を攻めた際、戦火を受けて古記録を焼失した。開基などは不明であるが、寺伝によれば、明応2年（1493）醍醐三宝院（京都市伏見区）の弘範が中興したと言われている。



堂跡については、現在残されている基壇の約四倍の規模をもつことが明らかになり、七重塔の

位置も、寺域東側に指定されている。寺域は、東西約二七〇メートル、南北約二四〇メートルの規模を持っていた。

寺の場所が高台なので恋瀬川方面に広がる田（鈴負井のあった）が良く見える。

室町時代の作と伝えられる宝塔鈴（塔婆鈴・密教用具）がある。この宝塔鈴もこの三宝院から伝わったものと考えられている。

・ 若宮八幡宮

中町・香丸通りにある「柿岡街道入り口」信号を入った通りの突き当たりにある。この通りは柿岡街道と呼ぶが、この入り口までを別名「八幡通り」と呼ぶ。この若宮八幡宮は歴史のある神社には違いないのだがよくわからない。宮司はおらず、総社宮で管理している。神社の敷地はあまり広くはなく、裏手は崖のように低くなっている。



若宮八幡神社本殿（市指定有形文化財）

鳥居の先に仁王門のような四足の門がある。

境内には左手に桜の木、右手の奥に大きな木

(けやき?) が聳えている。写真集「いしおか昭和の肖像」に載っている写真には今の櫓の前(神社の右)に大きな松の木があった。この木を地元では「鞍掛の松」と呼んでいた。八幡太郎義家が奥州征伐の時にここで戦勝を祈ったとされ、この時にこの松の木に自分の乗っていた馬から鞍を外して枝に掛けたと言い伝えられています。三村地区にも鞍掛の松と呼ばれる松が残っていたというが、松の木はどこかで枯れてしまうのだろう。

拝殿と本殿は一体で元文(1736~1741) 建立

「若宮八幡宮由緒」(現地看板) によれば

・神龜5年(728) 9月に創建

・永保3(1083) 八幡太郎義家が蝦夷征伐の成功を祈願。

・應仁3年(1396) 太田道灌が武運長久を祈願

・天正18年(1590) 焼失

・慶長7年(1602) 別当福蔵坊が本社並びに拝殿を建立

・寛永4年(1627) 皆川山城入道が本社拝殿を再建立して御供免10石を寄付

・寛永5年 領主松平伊勢守が本殿と拝殿を修復して應神天皇の像を奉納

・元文の頃、今の神社を改築

この説明では太田道灌が1396年に参拝したという記録があると書かれている。しかしこれは確認できていない。また道灌の短冊に書かれた歌が総社宮に奉納されているが奉納時期は未確認だ。入口に建っている四足門には左右に風神・雷神が祀られており、毎年10月10日に例祭(総社宮にて管理)が行われる。

我が労音史(10)

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1980年の社会情勢と音楽状況

「大平内閣提唱の『文化の時代』『地方の時代』に特徴つけられ、首相の私的政策研究会は「田園都市国家構想」など9つの研究グループを発足させ、その第3章『文化の時代』では、『高度経済成長の目覚ましい成功が国民の生活を飛躍的に向上させたが、その成果のうえに、『文化の時代』の国づくりを目指す。文化の問題は個人の趣味の問題(私事にすぎない)という考え方は過去のもの、今や文化は公事、国事である。文化投資を先行しなければ人口は定着しない時代になった。：経済的投資による人口集積より文化的投資を先行させる地域開発方法である」と述べている。これらの論調は、文化の先行投資による日本列島改造計画を想起させる。」

この構想は具体化され、その後の鈴木内閣でより促進される。自治省は地域文化の中核として「リージョンプラザ(地域広場)」構想を発表、82年度から10ヶ年計画で「地方文化の時代」に相応しい事業として「個所に30~50億円、総額1兆円以上になる計画を発表。具体的には「大規模な文化施設を中核に、保険医療・労働・産業・スポーツ・レクリエーション等の施設のほか、公園や緑地を配し広域市町村の新しいタウンセンターをつくる。また、リージョンプラザ中心の活動を活発化するため、全国横断的に演劇・音楽・美術

などの行事を繰り広げそして、これらの活動団体には補助も考える。地域活動を支援する地域文化振興財団をつくることも検討、これまでの縦割り行政で各省庁がバラバラやっていたものを一本化する。」これにより大幅な歳出削減し、行政改革推進の引き金として位置づけられた。この時期自治省の砂子行政局長は「主要道路の舗装などネットワークの整備は終わり、これからは地域の特性を十分考えながら地方文化を考えていく時代」と言い、この施策は大手建設業(ゼネコン)の大きな後押しで、各地方自治体の各種文化施設(ホール・体育館・集会場等)の建設や増改築で実施され、管理・運用は自治体の外郭団体(「〇〇文化振興財団」(第三セクター方式))を新設し委託した。現在ではこの財団による文化的催事(音楽会・演劇等)が採算無視の低料金で行われ、市民による自主組織の活動を大きく圧迫した。

ソ連のアフガニスタン侵攻と言う暴挙に抗議する国際世論の高まりに呼応して、国連特別総会ではアフガニスタンから外国軍隊の即時撤退を決議。この年イラン・イラク戦争がはじまり、カーター大統領がイラン制裁・国交断絶を決定。ポーランドでは自主管理労組「連帯」が結成され、東欧の民主化が進展、同国の最高裁は党の指導的役割を削除した「連帯」の規約を認可した。韓国では民主化を要求する学生のデモが全国に波及し、非常戒厳令が発令されて光州事件で頂点に達し、全斗煥が軍事クーデターで大統領に就任。西独では緑の党が連邦組織として設立大会を開催。日本政府がモスクワオリンピックをボイコット(世界67ヶ国)。

アメリカではレーガン大統領が当選、ユーゴではチトー大統領が死去。大平首相が急逝し鈴木首

相が誕生、この年の衆参同時選挙で自民党が圧勝。総評定期大会では、社・公中軸路線（政治原則で共産党排除を明記）所謂社公民反共路線が前面に出た。

新エネルギー総合開発機構が発足、自民党の憲法調査会が3年先を目標に改憲論議を始める。自動車生産台数が年間110万台に達し、世界第一位となる。自衛隊スパイ事件が発覚、元陸将補と現役尉官2名が逮捕。最高裁が「免田事件」の再審を決定（死刑囚初の再審）その後完全無罪判決。景気は停滞で実質所得はマイナス、中国の胡耀邦総書記が文革を全面否定。雑誌創刊ブームで「ナンバー」「写楽」「ブルータス」他が相次いで発刊された。堀米ゆず子がエリザベート国際コンクールに優勝（日本人初）、第10回シヨパンコンクールでダンタイソン（ベトナム）がアジア初の優勝。日本の海老彰子は第5位になる。新交響楽団が（日本の交響作品展4・伊福部昭）を開催し、核戦争告発の音楽会を東京と広島で開催。群馬フィルが赤字4千万円で危機に直面。第2国立劇場予定地が渋谷の工業試験場跡地に決定。元ビートルズのポールマッカートニーが国内への大麻持ち込みで国外退去。

この年、マントヴァーニ、池田鉄（新星日響運営委員長）、木田高介（ナターシャセブン）、越路吹雪、ジョンレノン、東山千栄子が逝去。

1980年の労音の動き

第26回東京労音総会は1978～1980年の3ヶ年計画を総括し、1983年の創立30周年を目指し、新3ヶ年計画づくりの目標は「全ての職場、地域、学園にサークルを作り、3万名の会員・3千サークル・月刊音楽100部・千名の

委員の育成」として、全地域とサークルで計画を立てることを決定した。80年代最初の取り組みとして、第一次会員拡大月間を4～7月として、5月「ロシア共和国民族アンサンブル」夏に被爆50周年で「カンタータ人間を返せ」を成功させ、平和擁護・被爆者救済法の制定を目指し運動を展開させる。第二次会員拡大月間は9～12月として、「布施明」例会「回と「メルセデスソーサ」「スイトハニー」例会を成功させる。地域例会は翌年2～3月に全地域で取り組み2万4千名以上を達成させる方針を決めた。

例会・組織活動の問題点として「例会全般で労音独自例会（主催）の比重が減少している。出演条件で主催できない、多くは単独で会場を埋められないので、共催や席の一部買取る状況（毎月20～30%）。主催例会を増やしていくには、事前の取り組みを強化し絶えず会員拡大をする。現在の音楽会の状況に即して、入会方法の改善や宣伝方法を強化する。サークル数はこの一年で92サークルが減少（現在183サークル）している。嘗ての様に「例会ニュース」を回覧しただけでは例会に参加しない、また臨時会員の割合が増えている。複数の世話役でサークル作りの計画を立て、楽しい仲間作りをすることが必要」と総括した。

例会活動は、一部買取例会を含め、月平均16種目17回（年間194種目212回）を実現し年間延べ15784名の会員が組織された。最重要活動として取り組んだ「カンタータ人間を返せ」は日本の近代史や第二次世界大戦等の学習会、被爆者援護法の署名活動（2000名の署名と40万円のカンパ）を、労音の枠を超えた取り組みにし、211名の合唱団が5ヶ月にわたる練習を重ね、高水準の例会内容をつくり、3118名の会員鑑賞し感動を得た、

その内容がNBC放送から全米に報道された。

全国労音の共同企画として前年から始まった民族音楽シリーズは、2月に「エルネストカブール」5～6月に「ロシア民族アンサンブル」11～12月に「スイト・ハニー・インザ・ロック」11月に「ブッペン・ハジャリカ」の各例会は、其々の民族の歴史的な発展の中から大衆の生活に根ざして生み出されたもので、民族の悲願・主張が盛り込まれたものが多く、聴衆に深い感銘を与えた。一般的には無名の専門家を取り上げ、サークル活動の力で成功させたことは、労音運動のちからです。特に「ロシア民族アンサンブル」の取り組みは、民族音楽の継承・発展に学び日本の音楽運動に役立てることを目的にしたことが成功の要因です。

クラシック例会では、曲目にベートーベンの4大ソナタを組んだ「園田高弘ピアノリサイタル」は、会員の要求に応えた内容で多数の会員が組織された。また、普段着のコンサート＝高橋悠治では、プロジェクトチーム（手作りのチラシ・ポスター・チケットなど）をつくり多くの参加者を集めた。更に、一般音楽会の高額入場料化が進む中で「ベルリン室内管弦楽団」「コレギウム・アウレウム」「ナルシソ・イエペス」など定額料金の会費設定で満席にした。

ポピュラー例会は、ニューミュージック系に希望が集中し制約された企画になったが、「加藤登紀子」「森山良子」「上条・倍賞ジョイント」など、実力派の歌手例会では、個性のある内容と優れた歌唱力で高い評価を得た。「因幡晃コンサート」では、実行委員会を組織しファン層に呼び掛けてプロジェクトチームをつくり、2例会で3200名の拡大を遂げた。その他、水越けいこ・とんぼ・

高橋忠史・下村明彦・本田俊之などにも、プロジェクトチームを作り創意を生かし、宣伝・普及・内容作りから当日の例会管理まで、一貫した活動を自主的に行い、大きな成果と新しい経験を労音内に生じさせた。

伝統音楽・芸能の例会は、民族楽団「ふきの会」を、会員出演による「新曲さくら」や創作「出稼ぎの歌」で取り組み、3ヶ所で2000名を組織注目を浴びた。都下地域では各公会堂を利用した寄席例会で、4000名以上を、大衆芸能の普及運動と位置づけ新しい経験と成果を生んだ。

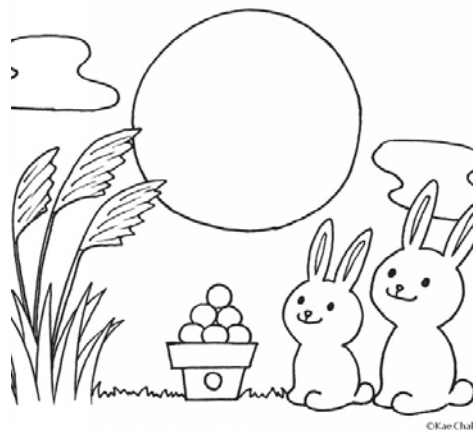
例会外の活動として、地域から100名の代表を集め「魅力ある労音サークル」をテーマに、日頃の活動の悩みや職場の実情が報告される中で「サークル活動は、必ず複数の世話役で運営、その世話役が仕事や活動にも魅力を持った人間に成長を目指す、人間関係を大切にして信頼を勝ち取ることが必要。」共通の経験としてだされた。スキー友好祭は黒姫高原で913名、夏の友好祭は甲武キャンプ場で500名が参加。毎年行われている函館労主催の「労音大学」には東京から400名が参加し全国の仲間と交流を深めた。

第6回全国労音交流集会は長野県の諏訪で開催され、東京から130名が参加し全国の仲間と交流を深める。記念演奏には地元の御諏訪太鼓と共同企画の杉田二郎が出演。記念講演は長野県篠井高校の若林繁太校長が「多くの落ちこぼれ生徒を立ち直らせた」生々しい体験談で深い感銘を得た。第26回全国会議は、東京の九段会館で全国から1000名の代表により開催された。サークルの減少や弱体化の共通する実態を報告し、弱点の原因と克服の方向について討議が深められた。東京からは250名が参加。記念演奏会は日比谷公会

堂で行われ、こんにやく座・TONY・河島英五・西岡たかし・高橋竹山・ブッペンハジャリカが出演し参加者を楽しませ、音楽内容の研究に役立てた。

この年の海外演奏家は、第6回世界の民族音楽シリーズ「エルネスト・カブール」、第7回「ロシア民族アンサンブル」、第8回「スイート・ハニー・イン・ザ・ロック」この年に留萌労音が誕生、全国11万人

つづく



石岡市指定文化財（十五）

兼平智恵子

石岡市民にとって指折り数えての待ちに待った中心市街地最大の催し、常陸國總社宮例大祭が一週間後、九月十四（土）、十五（日）、十六日（月）開催されます。

中心市街地の十五町内が一年交代で「年番町」となり、大祭の折には町内に「仮殿」を造営し御祭神をお迎えするという大役を担うと共に、年間

を通して神社への奉仕に努めます。

今年の年番町は國分町（現在の町名は府中三丁五丁目）です。石岡駅からメイン道路、通称八間道路または御幸通り（昭和天皇が昭和四年十一月、陸軍特別大演習、志筑御野立所臨幸の為の御道筋だったのが名がある）を西に向かい丁字路（国道三五五線、通称笠間街道）を右折（左折すると中町通り）すると香丸町通りに入り、通り過ぎると笠間街道の両側に広がるのが國分町で赤白のNTTの鉄塔が目印となります。

この町内には奈良時代に聖武天皇の詔で建立された特別史跡に指定された常陸國分僧寺の遺跡が保存されています。この歴史のある町内として、おまつりに華やかさを誇る山車にのる人形が仁徳天皇さまです。

今年世界遺産に登録された百舌鳥古墳群の大仙陵古墳の仁徳天皇さまは、租税を三年間免除したという伝承があり、

「高殿に登りてみれば 煙り立つ 民の竈は 賑わいにけり」

の御歌から、民の生活を常に心配して見守る時の様子が人形のモデルになっているそうで、みどころです。

そしてもう一つのみどころがあります。

それは山車に掲げられる「國分町」の扁額に注目です。初日の神幸祭、三日目の還幸祭の供奉行列の折、大神輿でお出ましになった御分霊が國分町の山車の前を通り過ぎるまで「國分町」の扁額は金文字の「敬神」の扁額に替えられ、お迎えし、お見送りするとの事です。

仁徳天皇さまと共に國分町の皆さんの御祭神にたいしての尊敬の念の姿勢をもどうぞご覧下さい。また、山車の前でお囃子と共に女子会の皆さん

んが扇子や提灯を持つての「おつしやい」の掛け声も仁徳天皇さまを讃える掛け声になっているそうで、どんな掛け声になっているでしょうお楽しみ下さい。

※「仮殿」とは 本殿から御祭神の御分霊が大神輿へと遷され、町中にお出ましになった御分霊が、人々の歓待を受けるために設けられる仮のお宮で、「おかりや」とも呼ばれています。

本題の石岡市指定文化財のご紹介に入りますが……やはりおまつりに因んで仲之内町の獅子頭をご案内しましょう。

仲之内町の獅子頭 府中一〜十・三二

(隅の宮福德稲荷神社)

有形 民俗

指定 平成五・三・二五

仲之内町は現在、府中一丁目となっています。

石岡駅より八間道路（御幸通り）を前進し水戸信用金庫石岡中央支店の交差点を右折、一方通行になっている道路に入り、間もなくして十字路交差点を越え、右側の隅の宮福德稲荷神社を中心として広がる戸数の少ない町内となっています。

石岡市教育委員会発行の「石岡市の文化財」によりますと土橋町の獅子頭と同様、常陸國總社宮例大祭の露払いの役をもつ獅子である。

製作年代は明治二九年で、東京下谷西稲荷町（当時）の彫刻師、有坂正右衛門の作との刻銘がある。石岡市内に現存する古い獅子頭の中では大きさ重さとも最大であり、正面全幅七〇cm、全高五四cm、側面幅六八cmで、重量は二五kg。材料は堅くて重い櫟を使用しており、特殊な寄木造で仕上げられている。

明治三年の大火で隅の宮福德稲荷神社が焼失し

た際、獅子頭も焼失してしまい、中断していた祭礼へ再び参加する為、焼け残った「隅の宮福德稲荷神社の御神木」を使って今の獅子頭が作られたとの言い伝えがあるそうです。

神輿の露払いを務めている土橋町とは相町（年番の際お互いに協力しあい、祭礼以外にも、それぞれの町内へ、獅子、山車が訪問しあつてご馳走を受けるなど、いわば親戚付き合いをする町内）になっており、頭上に宝珠を付けている仲之内町の獅子は雄、土橋町の獅子が雌と言われているそうです。

今年も揃って大切なお役目を果たされる事でしょう。

○高らかに謳い天寿全うの蟬ひとり

智恵子



因 縁 伊東弓子

言い訳がましい文を書いている。
自分が夏の終わりに・・・ここにいます。

この大事な時期に今までになかった怪我をしてしまった。自分の所為ではない、年令の所為かと思うと何か悔しい思いで仕方がない。でも犬を確りと、手綱さばきが出来なかったのは自分なのだからと反省もした。

八月の末、いつものように台から湖岸へ、そして帰り道も涼しい山道へ行けるよう散歩している時だった。いつになく自己主張もせず、私の言う“右に曲がろうか”堤防からおりて行こう”という言葉にそって歩いていた。左の細い道から女の人と犬の姿が出てくるのが目に入った。“ああ！あの人とあの犬だ・・・”とわかったので、

「いづみ いそいでいくよ」と前進したつもりだった。しかし、犬同士はひどい吠え声をたてはじめた。次の瞬間もう倒れていた。

「ああ 転んだ」と思っただけで、両手で持っていた綱の右手は離れ、コンクリートの道に叩きつけられた状態、でも頭はぶつからなかった。

老いの顔をまず氣にして撫でていた。

右手のあちこちには傷はあったが・・・ただ、早くこの場を去ることだけ考えて立ち上がった。

相手は何か言っているようだが聞こえず、私も体裁が悪いので歩き出した。しかし歩いてみると少しづつ少しずつ膝や腕が痛み出した。左腕が重症のようだ。いつもの散歩の何十倍も疲れた。

医者に行く間もなく“風”の原稿も仕上げないまま、その晩は前身が懈（だる）く早く寝てしま

った。

家事の辛いこと、一つ一つに時間がかかった。御留川歩く会の準備も歯ぎしり噛んでした。原稿の仕上げも清書がおくれ短めにこの文となった。

こんな状況になったのも過去からの出来事につながっているように思えた。

思えば、あの犬との出会いからしてよくなかった。三ヶ月に一遍、その家に寄ったり、その道を通った。その度に吠え声はひどく攻撃的だった。

「私、悪い人間じゃないよ。早く覚えてね。」と寛容に声かけしていたが、重なるにつれ、「うるさい。そんな声でなくな！」と 言うようになり、私の風貌も悪くなっていたのだらう。でも姑さんは「ごめんな ひどく吠く犬で、いやな感じだらう。何もつてきてくれたものを見せてもらおうよ」と受け取ってくれた。

その中嫁さんのいる時だった。

「もう来ないでよ。届けて貰わなくていいから」という。私悪いことしたかな と思いながらも小魚の詰め合わせを持って姑さんにあげた。

これで気が晴れた訳ではないが、区切りをつけ、安心していった。その犬に合うこともなく心安らいだ散歩の日が続いた。

夏の初めの頃だったろうかこんなことがあった。ある道で同じ人と犬に出合ってしまったのだ。女の人は「そっちへ早く行ってよ」と、ふう悪く指示して言う。

“なんだろう あんな言い方して…”と思いはがらも分かれて一安心した。

「いづみ、あっちへ行かないよ、けんかになるからね」と木の下で話しかけていた矢先なのに……



私もうっかりしていたか、あつという間に犬は走っていた。「ああ！だめだ」と思った瞬間、取り組み合いになっていた。あの女の人と犬が戻ってきたのだった。お互いに犬の名を呼びながら放すまいと必死だったのだが、もう噛みつきあっていた。

「こんなことになってしまつて、何で綱を放したのよ」と攻撃の言葉がとんできた。その後もうらみがましく何か言っていたが黙っていた。

“じゃあ何で戻ってきたりしたのよ”と心では思ったが、言つても仕方がない……と力も抜けて重い足を引きずりながら帰り道をいそいだ。

お互いに犬には噛み合つた傷はあつたらう。いづみには三ヶ所あつた」「謝りに行く必要もないよな」と自分に言い聞かせ、とうとう行かなかつた。

そう、今回の転んだ怪我は、世間で言う「罰が当たつた」ということになるのだらうか。

結局、自分に降りかかつてくる。周りの人にも迷惑をかける。なにより自分自身 この痛みからいつ解放されるのだらう。」

「いづみよ お前も人を攻撃するののか」と話している私だ。

「決意」

小林幸枝

尊敬する白井啓治先生が亡くなって二ヶ月が過ぎました。正直まだ亡くなったことに、気持ちの上でピンときていません。まだどこかへ旅行にいつているのではないかとさえ感じてしまっています。

白井先生には生前、私に何か言いたい事があつたのじゃないですか？ と聞きたかった。もつと学びたい事、いっぱいありましたのに……。

恋物語百もあと六十二話残っています。

私もまだこれに挑戦します。と決意を新たにしています。

出来るならば来年六月の定期公演&白井先生の遺作品を含めて公演をしたいと思っています。

皆様のご支援、ご協力をよろしく願います。

どうか私を見守って下さい。白井先生、ごゆっくり安らかなご永眠してください。

あなた

まほろばの里が黒く染まったら

あなたは流れ星になって

私の願いを叶えてくれますか

約束してください

あなたが約束をくれたら

私は黄金の実りとなって

あなたの腕の中に眠ります



父のこと(13)

菊地孝夫

訂正

この連載(9)の冒頭の父の経歴に誤りがありました。

「東京商科大学(一橋大学)の受験に失敗し、1年浪人したと書きましたが、大学なので中学からでは受験できませんから、これは明らかに私の勘違いでした。横浜高商在学中、東京商大への進学を夢見ていたのは間違いありません。

亡兄康夫の一橋大合格を、手放しで喜び、ひとり祝杯を挙げていたのですから。

また変換ミス、誤字なども多々あります。

ほとんどの文章は記憶だけに頼って書いてきた結果なので、読み直してみるとしばしばこのような初歩的な間違いを繰り返してしまっています。極力文献や辞書などを当たっているつもりですが、でも、なかなか思うようにはいきません。

読者の指摘が頂けると大変有り難いことです。御面倒でも事務局まで連絡して頂ければ、とおもいます。

ここにお詫びして訂正致します。

もう1箇所、かつての先祖に菊池慎七郎なる人物がいて・・・と書きましたが、おもいついて石岡市役所で古い戸籍簿をコピーして見ましたところ、菊池慎七郎の名前はどこにも出てきませんでした。

その代わりに

菊地多助

「明治十六年拾月七日 茨城縣新治郡關川村大字石川壱番地 菊地菊次郎ヨリ妻子携帯分家ス」となっていました。

1883年

菊地善助 式男

天保十一年九月十一日出生

1840年

明治二十六年十月十一日退隠

1893年

明治二十二年十一月十三日午前十二時死亡

1913年

享年 七十四歳

菊地多助の妻 とら

「茨城縣東茨城郡白川村大字上合「中根半兵衛」

四女 天保十一年五月壱日出生」 1840年

「年月日は不詳」となっていますが、菊地家に嫁いで来ています。

明治三十三年五月壱日没 八十六歳 1924年

菊地鎌太郎

明治元年九月十一日出生 菊地多助 長男

明治二十六年十一月三十一日相続 1893年

明治三十六年三月三十一日 茨城縣新治郡關川村大字

石川二三番地全居ヨリ轉籍届出同日受附入籍

(矢口大二郎 印) 1903年

「妻とよト協議離婚届出明治七年四月二三日受附

(矢口大二郎 印) 1918年

明治十一年二月二三日午前五時本籍に於テ死亡同居者菊地順造届出 全月二四日受附

(石原 印) 1922年

享年六十六歳

明治十一年二月三〇日菊地順造の家督相続ノ届出アリタルニ因リ本戸籍ヲ抹消ス (石原 印)

菊地鎌太郎の妻 とよ

明治六年五月一五日茨城縣新治郡石岡町大字石岡五百五拾壱番地川崎大二郎亡父辰五郎そら四女入籍

1873年

明治十年十月十八日没 1921年

菊地竜太郎

菊地鎌太郎とよ夫妻の長男

明治二十五年四月二十二日出生 1892年

明治二十五年五月八日没 1歳

菊地親次

明治二十六年八月二十二日出生

1893年

明治二十八年十一月八日没 3歳

1895年

菊地順造

明治28年5月一〇日出生

1895年

菊地鎌太郎とよ夫婦の二男

明治九年宮川あきと婚姻届出

1920年

明治二十五年五月死亡 享年56歳

1950年

菊地西之助

明治三十年四月二十八日出生

1897年

菊地鎌太郎とよ夫妻の三男

明治四年七月十日東京府日本橋區堀留町一丁目二番地ニ於イテ死亡 享年十九歳 1915年

菊地順造の妻 あき 明治三十四年九月一六日出生 1901年

茨城縣新治郡石岡町大字石岡1084番屋敷戸主宮川留次郎みつ夫妻の五女

(上の姉はるが宮川家を継ぎもう一人の姉が関口家へ嫁ぐ)

平成 享年99歳 2001年

菊地敏夫

菊地順造あき夫妻の長男

大正九年二月一九日埼玉縣安達郡浦和町三五八番地ニ於イテ出生父菊地順造届出大正九年十二月三十一日浦和町長代理助役小沼忠愛受附大正十年一月一二日 入籍 1920年

明治五年二月二五日没 享年七十三歳 1993年

宮嶋サト

大正十三年十月十六日

東京府阿佐ヶ谷に宮嶋龍夫マサ夫妻の3女として生まれる 1922年

明治七年1月14日肝臓がんで死去 享年七十一歳

菊地康雄 次男 1995年
 妊十一年生まれ 1920年
 妊十四年疫病で死去 享年4歳 1924年
 菊地久子 長女 1927年
 鞠2年生まれ 1927年
 鞠29年死去 2017年
 菊地康夫 菊地敏夫サト夫妻の長男
 鞠二十二年十二月九日新治郡石岡町大字石岡42
 1番地に生まれる。 1947年
 鞠四十二年九月十六日死去享年二十歳 1968年
 菊地信雄 二男 一九四八年
 鞠23年同年夭折
 菊地秀夫 三男
 鞠23年同年夭折
 菊地孝夫 四男
 昭和25年12月21日 1950年
 私のルーツを探す旅もそろそろ終わりに近づいて
 きました。
 この1年ばかりずいぶんと資料を読み何人かの方
 に尋ねたりしました。
 菊地菊次郎や菊地善助から、さらに遡るのはさら
 に時間がかかりそうです。
 旧関川村一番地、二三番地。この地名が手掛か
 りとなるでしょう。
 天明・寛政(178・90年)あたりまでは辿り
 つけると思いますが、調べる対象はどん
 どんと増えるばかりです。
 菊地多助の本籍地は
 「茨城県新治郡石岡町大字石岡千八百五拾七番地」
 となっています。
 おおよそ石岡駅東口あたりでしょうか。

「菊地菊次郎」が多助の父善助の長男であるのか、
 またはその父であるのか、関係は不明です。それ
 はまた別の戸籍を調べなければなりません。
 菊地多助の長男が曾祖父「鎌太郎」という事が新
 たにわかりました。
 家の仏壇にあった、過去帳のようなものと位牌か
 ら照合してみると次のようなことも判明しました。
 祖父順造が四人兄弟の次男であったこと。
 大伯父親次が次男なのに、戸籍には記載されてい
 ないこと。
 大叔父の菊地西之助が東京日本橋區堀留町1丁目
 2番地にいた事。
 石岡町大字石岡1857番地 高祖父多助
 " 1084番 祖母あき
 " 551番地 川崎留次郎
 曾祖母とよ
 関川村大字石川1番地 善助 菊次郎
 " 23番地 曾祖父鎌太郎
 東茨城郡白川村大字上合 中根半兵衛
 高祖母とら
 あとの手掛かりは、東耀寺の過去帳と墓石に求め
 るしかなさそうですが、東耀寺は二度ほど火災で
 焼けているので、過去帳も失われてしまったかも
 しれません。
 墓石は2、30年前母が改葬したので以前のもの
 はあまり残ってはいません。
 川崎と刻まれた墓石があり、お盆などに行くと
 時々花が供えられていたのを、子供心に不思議に
 思っていました。それは曾祖母に繋がるものだった
 のでした。

〈ぼくが罪を忘れないうちに〉 (抄)

そこからさがが罪だ
 ぼくはぼくの屈辱を
 同朋の屈辱に結び付けた
 ぼくはぼくの冷酷な心に
 論理を与えた 論理は
 ひとりでうちからそとへ
 とびたつものだ

無数のぼくの敵よ ぼくの過酷な
 論理にくみふせられないように
 きみの富を きみの
 名譽を きみの狡猾な
 子分と やさしい妻や娘を そうして
 きみの支配する秩序をまもるがいい
 きみの春のあひだに
 ぼくの春はかきえ
 ひよつとすると 植物のような
 廃疾が ぼくにとどめを刺すかもしれない
 ぼくが罪を忘れないうちに ぼくの
 すべてのたたかいは おわるかもしれない

吉本隆明 初期詩編より



【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らして (31)

さと女

残暑お見舞い申し上げます。連日の酷暑いささか疲れ気味です。梅雨寒で心配したお米は、その後の暑さで順調の様です。帳尻が合うようですね、我が家の栗も沢山の可愛い実が日ごとに大きくなっています……。

●新盆参り……

・お盆のお中日、新盆参りに行きます。それにしてもこの湿度、朝から70パーセント超え、昨夜は寝苦しく眠れなかったので、クラフトの見本品を作ってみた、途中ですがなかなか可愛いものが出来た。好みの色で、其々が特徴のある作品を作ってみようと……。

・午前中3件の盆参りに行き、午後は9月に亡くなった“はなな”の路子さんの所へ、笑顔で迎えてくれたのは遺影だった。何とも寂しい。家に帰るとめったに表れない「たまむし」が飛んできた。路子さんが会いに来てくれたのかも知れない……合掌！

・墓掃除……毎年お盆前に共同墓地の掃除をする。朝の集合、鎌や箸を持って1時間ほどで見違えるほどきれいになった。みんな汗びっしょり、この湿気はたまったものではない。竹の師匠から蓮の花が開いたと写真が届いた……。

●猛暑……

・夕方前夕涼みがてらに、柿岡で開催されている、八坂神社祇園祭に出かける。お祭りと聞くと心が

弾むあまりの暑さに、早めに帰ったがそれでもワクワク感を味わって……。

・月日が矢のように過ぎていく。それにしてもこの暑さ、玉のような汗が滴る。今日はそんな汗を気にする余裕もなく一心不乱に竹に格闘。相棒の人はスマートに竹を割けるようになってきた。竹の長さ3メートル50センチ、分割したものから幅2ミリ、厚さ0・2ミリのひごを作る。鉋の構え方を何度も注意されながら、半分位は使い物になるかな？と……師匠の庭には大きな蓮のつぼみが今にも咲きそうに風に揺らんでいた。

・とにかく暑かった。石岡駅前にある「御幸通り」はもつと暑かった。石岡商工会議所青年部主催のサマーフェスタが開催された。夕暮れになり幾分風が吹いてきたところ、恒例のへそ踊りの行列が、お腹に描かれた顔のペイントが汗で流れている、たくさんさんの団体が優勝を競って踊っていた。9時半からはメインの大洗高校のマーチングバンドの演奏と行進は、さすが圧巻でした……。夕方になるにつれ賑やかに、家族連れも多く夏休みのいい思い出になったことでしょう……。

●諸々……

・今日も梅雨空、霧雨が……。そんな中でも野菜たちは生き生きと育っています。トマトつまみ食いしながらの散歩でお腹いっぱいです。

・本当の同窓会は、気分が落ち込んでいる最中だったので欠席した。その後やっぱ「いくちゃん」に会いたいよね、となったらしく日程と場所決定で連絡がきた。これでは行くしかない。そんなわけで、今日はミニ同窓会、8人も集まり、4時間もおしゃべりした。

・友人が小美玉の方でデイケアの施設を作った。

長年温めていた夢を実践するなんてすごいなあ……。今準備段階、間もなく開設予定です。

・東筑波ユートピアを久しぶりに訪問。テレビの志村動物園ですっかり有名になった日本一、客の来なかった動物園。クラウドファンディングのおかげでイノシシ牧場がリニューアル、数日前無事開園の運びとなったと言うことを聞き、小川社長に会いに行った。楽しそうな家族連れの声がかどまし。おさるさんとイノシシマメちゃんショーの後は、おさるさんを抱っこしての記念写真、順番待ちの行列ができていた。イノシシ牧場までは急坂を15分程歩かなければならず今回は体力が危ういので諦めた。牧場の景色は抜群……。紅葉の頃ハイキングを兼ねて行ってみよう……。小川社長はすっかり有名人。

・オリーブさんでエコクラフト……。集って来る女子は高齢だが、みんな元気です。美味しいランチ、デザートを頂きました。また、みんなで一週間頑張りましょう。



《風の吹き》

7万年周期説

菅原茂美

現生人類は7万年ごとに何やら大変革があるらしい。尤も近い7万年前(66,000年前)にはアフリカのエチオピアあたりから、新人に進化していたホモサピエンスが、黒人数百人単位でアラビア半島に進出してきた。そのサピエンスが今日の全人類。現在地球上の全人類はこのホモサピエンス一種類のみである。7万年ごとに大変革と言えば近々我々新人類に何かが起きるに違いない。私に言わせれば、何が起きるか大変革の内容は？

それは人類滅亡か、困難を乗り越え、見事に明るい方向に大変革。そうなれば、こんなところで人類滅亡など受け入れる事などできる話ではない。人類滅亡の最大の原因となりうるものは核兵器であろう。オバマ前米国大統領の呼びかけで着々核兵器は減少しつつある。但し中国は何とかしてすべての事において米国を追い越したい。強いその希望から核兵器は世界の方とは逆向きで、増産に励んでいる。即ちもし人類滅亡を招くとしたら、中国の核兵器増産が現在最大の難問であろう。今いかにしてこれを阻止するか、人類の最大の課題は、中国の核兵器増産をいかにしてストップさせるかである。いま中国は、貿易摩擦の張本人であり、核兵器増産に励み、知的財産権窃盗の張本人である。これをいかにして阻止するかが現在世界の最大の課題である。人類滅亡か繁栄の分かれ目である。

ホモサピエンスがアフリカからアラビア半島に

進出してきたから7万年たったが何事が起り得るか、私は第三次大戦勃発で人類滅亡。そんなことを起こすほど人類は愚かではない。

明るい希望として、人類は惑星へ進出：と行きたい。惑星ではないが差し当たって月に到達してまず月面生活の基地造りが考えられる。月での生活は、他の惑星へ飛び立つための足場となる。各国の狙いは。月の「極」。もしかしたら南極・北極には「水」が隠れているかもしれない。水さえあれば、電気分解をして酸素と水素がふんだんに得られる。再び両者を合わせれば電力が得られる。

7万年周期説によれば、3×7万年=21万年。これが我々ホモサピエンスの生まれた頃である。親であるホモ・エレクトスから突然遺伝子の大きく変わる突然変異で人種が生まれた。それが我々ホモサピエンスである。

それでホモエレクトス自身も突然変異で210万年前、ホモ・ハビリスから生まれた。そしてハビリスは280万年前、アウストラル・ピテックスから生まれている。そして人類は700万年前、大型霊長類の類人猿から生まれ、直立二足歩行を始めた。この直立二足歩行をもって「人類」と名付けている。

奇しくも人類の大きな変異は7万年の倍数の年に行われている。しかしこんなことを言っている科学者は世界中にいない。

更に大きな変異は人類の祖先である類人猿の中から、直立二足歩行をするかわりもの

700万年前に地上にあらわれる。直立二足歩行する類人猿をもって人類の誕生としているので、

奇しくもこれも700万年前なのであったから7万年の1000倍の年に当たる。なお700万年前は色覚変化を起こした記念すべき時代ともいえる。なぜなれば、人類の祖先に当たるチンパンジーとの共通祖先は、熱帯の森林の中で生活をしていた。そして恐竜と暮らしていた白亜紀まで哺乳類は、緑一色で赤や黄色を見分ける必要はない夜行性であったため完全に色盲である。恐竜滅亡まで色盲であったのだから、広い原野であるサヴァンナに出たという事は色覚が発達しない事には果物など見分けることができない。という事だ。とにかく哺乳類は全て色盲なのである。人類も多かれ少なかれ、なにがしかの色盲なのである。闘牛で赤い旗を振って会場を興奮させているが、牛は完全に色盲なのだから、どんな色でもよい筈。ただ人間が興奮するために、血の色をした赤い旗を振り回すだけの事。牛の方も動くものなら何でもよいわけなので、旗に向かって突進するだけ。いずれにしてもこうして種は分かれていった。

人類は次の7万年後、どこで何をして暮らして生きているか。先ず生きているという証拠はあるのか。アインシュタインは、報道陣の次の大戦の主たる武器は何でしょうかとの質問に対し、3次大戦が何を使うかは、およそ見当はついてはいるが、わからない。しかし、4次大戦があるとすれば、間違いなく棒きれと石ころであろうと言っている。人類がこれから7万年間、現在の環境汚染状態を続けるならば、1万年生きているという保証さえ、どこにもない。1万年は確実に生きているという科学者よりも、1万年は危ういという科学者の方が多い。

徳川家康が生まれたのは戦国時代最盛期？の天文十一年（一五四二）年末らしいが、其の翌年夏に一隻のポルトガル船が種子島に来て鉄砲を伝えたとされている。しかし是には異説があつて、其れより十七年も前にポルトガルと交易していた日本人商人が鉄砲を手に入れていたらしい。

是を何処かの大名に売り込もうとしたのだが、当時の戦国大名は衰えかけた足利將軍の下に大内・毛利・今川・北条・伊達などが犇めいており、団栗の背比べで「是は！」と思える相手が居ない。

そうした中で貿易商人が目をつけたのが武田信玄の父親・信虎であり、八幡太郎義家の弟・新羅三郎義光から十七代目に当る。言うまでも無く常陸国から甲斐に進出した源氏系武将である。此の人は息子の信玄と不仲だったので悪く言われているが、戦国武將らしい人物と思われる。

密かに甲斐の国を訪れた商人は、ポルトガル製の鉄砲を試射してからは信虎に献上した。日本で最初に鉄砲の威力を知ったのであるから驚くのは当然で、是が他の大名に知れたら……と按じた信虎は鉄砲の秘密を自分の胸に封じてしまったのである。武田軍団は甲斐の国で育てた頑丈な馬を駆使する騎馬戦法に拘りを持っていたのであろう。

火縄銃では有るが、是を有効に活用したのが織田信長であり、天正三年（一五七五）には長篠の合戦で勇猛を誇った武田の騎馬軍団を壊滅させ、日本の合戦史を大きく変えることになった。

其の日は旧暦の五月二十一日、梅雨の真つ盛りである。火縄銃は雨天に使えない。「銃無し」も考えた信長は、徳川家康の援軍を入れて三万三千の兵と馬止めの柵で対応したのである。

日本では馴染みが無いけれども、メキシコ南部や中央アメリカの一部に西暦三百年頃から千二百年頃にかけて栄えた「マヤ文明」は文字や暦を用いた独自の文化を形成していたようで、近年は巨大神殿跡などが発見され話題を呼んでいる。

然しながら、世界三大文明として脚光を浴びるエジプト文明・黄河文明・インダス文明に比べるとマヤ文明の知名度は低く、「観光地」としても中途半端であり交通の便が良くないこともあつて日本から訪れるお客さんも多くは無い。

ところが、一九八〇年代に現地・グアテマラのピラミッドから発見された大量の土器・古銭などが日本で売りに出される事件？があつた。歴史的なものでは値段の付けようが無いのだが、此の場合は六十品目の土器、古銭（マヤの通貨）などに三億円の値がついた。当然ながら日本人が現地から買って来たものであるうと思つたのだが、グアテマラ政府は出土品の売買を禁止している。では、其れがどうして日本に渡つて来たのか？…或る新聞社が調査したところ、思いがけ無いと言ふか、奇妙な事実が判明したのである。

世界各地に存在する文化財は「ユネスコ」が厳しく目を光らせて其の保存に努めてはいるのだが、其れは主に売りに絡む事案である。グアテマラから日本に来た「三億円の財宝」は、日本人が現地の村人を頼んで掘り出したらしいが、現地の人々には謝礼か対価かは不明だが「日本の粉石鹼など」を渡したらしい。つまり発掘品は売買では無く粉石鹼との交換で得たことになる。洗剤三億円分は、かなりな量になると思ふが、誤魔化した？「マヤ文明」が余り知られて居ない頃の話である。

東国三社参りとして鹿島神宮・香取神宮・息栖神社を巡る参拝が、江戸時代には伊勢参りに呼応してかなり流行つたという。今でも時々ツアーなどが旅行会社などで組まれて訪れる方もまだ多い。

私は月に二回ほど千葉の銚子に出かけているが、息栖神社の近くを良く通る。そしてたまに思い立つと立ち寄ったりする。

先日久しぶりに立ち寄つてみた。すると、以前に比べて、大分境内が綺麗になつてきたように感じた。そして神社に参拝し、境内の歌碑などをいつも眺めてくるのだが、拝殿に向かつて右側に「笠間時朝」に係する歌が4点ある。

この歌碑について少し紹介しなければいけない気がしている。

笠間市では笠間時朝は、鎌倉時代に藤原氏系列の宇都宮氏からこの笠間に入り、笠間の佐白山に笠間城を築いた人物として知られ、18代続いた笠間氏を立ち上げた武将である。このような武将としての面が紹介されることが多いが、鎌倉幕府ではかなり力を持ち、こんな地方に数々の文化人としての足跡を遺していることは、あまり知られていない。

京都の三十三間堂に運慶など慶派やその他の仏師が協力して1001体の千手観音像が祀られているが、この像には寄進者の名前が判明している像我何体かあるが、鎌倉時代の寄進者としてはこの笠間時朝の名前のみが明らかになっている。

この息栖神社の歌碑の歌を紹介すると、
○ 鹿島潟 沖洲の森のほととぎす 船をとめ

てぞ 初音ききつる

(藤原時朝)

これは新和歌集に納められた 藤原時朝こと笠間時朝の和歌である。当時鹿島神宮詣の際に、この息栖神社の沖合いに船を停めて詠んだものだ。

○ 海原や 沖つ潮合に 立浪の 鎮めがたきは 心なりけり
(理然法師)

理然法師は息栖神宮寺僧となっており、当時(鎌倉時代)にはここも神仏習合で、境内には神宮寺があったのだろう。

また一緒に鹿島詣での船旅に帯同した僧侶がいたようだ。

○ われのみと 待ちつる暮を 郭公 (ほととぎす) またたか為に 鳴てすくらん
(諦如法師)

○ 里とをき 山のすそのの ほととぎす たか 為になく 初音成らむ
(稱佛法師)

この2人の僧侶がどのような人物であったのかはわからないがかなり興味深い。

笠間周辺にはこの時朝が残した幻の六体仏(三体のみ現存)があり、2年に1回(文化財公開日)と、毎年お釈迦様の誕生日(4月8日)に一般公開されている。今年はこの公開年にあたり、10月下旬の土日に行われるようだ。

笠間六体仏(三体のみ現存)・・

弥陀教会、楞嚴寺、岩谷寺

スペイン旅行記(1)

木下明男

5月の末から6月の初めにかけて、恒例のスペイン旅行に「吉川二郎ギター音楽のルーツを探る」旅に参加した。今年は、参加者が少ない・・・その分濃密にスペインに触れることができる？

● 出発前夜

午前10時、常磐線で東京まで行き新幹線に乗る、新大阪で在来線に乗り継ぎりんくうタウンのスターゲイトホテルに17:00着。駅内の居酒屋「天国」で恒例の前夜祭。



● 一日目

午前10時25分関空出発。良く晴れていて、快適なフライトが予想される。アムステルダムまで約9500キロの移動・・・マドリッドに到着したのは、午後8時頃？日本時間だと翌朝の日の出を迎える早朝ですね！まるで徹夜明けの様な・・・猛烈に眠いの、まだ太陽が燦々と輝きまるで異空間の中に迷い込んでしまったか？今年はやエ

ベボストーンホテル。ホテルのレストランで無事到着の祝杯をあげ、河野さんとの再会を喜ぶ・・・。



● 二日目

グラナダまでの移動日、二時半発の高速バスで高速道路をひた走る！見える景色はオリーブやブドウ畑ばかり、時折風車や太陽光発電の再生可能エネルギー施設！何故か高い空に航空機の航跡が縦横無尽に描かれている。中間点のアルムラディエル(ある村である)で食事休憩、其の後さらに南へ、窓外の景色は延々と何処までも連なるオリーブの畑が、道路際に植えてあるエニシダの黄色が心を和ませる！グラナダに近づいて来ると雪を抱えたシエラネバダの山々が見えてきた。到着30分くらい前なのに運転手交代(組合との協定)そしてホテルサライ(グラナダは毎回このホテルに到着。一休みしてブラリ街中散策、夜はタコ料理の店で舌ツミ、仕上げはロブスターが丸々一匹入ったオジヤ鍋(パエリア風)、超美味しかった。

●三日目

午前中グラナダの街を散策、大聖堂の勇姿を眺め、中に入り日本語の解説機を持ちながら一時間見学、その後アルバイシン地区の散策、アルハンブラ宮殿の背後には、雪を被ったシエラネバダの山が！グラナダの街並み、カルメン様式の家にはブーゲンビリアが咲いていた。歩き疲れた所で昼食を、そのあとアルハンブラ宮殿が一番よく見える丘で写真の撮影会！



午後 8 時から、フラメンコギタリストホセマヌ

エルカーノのご自宅訪問です。温かく迎えてくれたご夫妻、早速アランブラビルで乾杯、話は盛り上がり！いつのまにかカーノの演奏会に、二郎さんの新工夫ギタルパも披露、時間は12時を大きく過ぎお開きに、楽しい一夜でした。

●四日目

午前中はアルハンブラ宮殿の一部見学。糸杉の回廊からヘネリッフェ宮殿に、様々な花が咲き乱れ、天候も良く眺めが最高！噴水池での写真もバッチリ、前日宮殿を眺めた丘も見え、たくさんの観光客が此方を見ていた。山々の雪もより近くに眺められ、沢山歩いた後には美味しいビールが待っていた。いったんホテルに戻り、今日の仕上げは、アルハンブラ宮殿のナイトツアー！昼間とはコースも違って趣もあり、夜景が綺麗だった。



●五日目

午前11時グラナダからアルメニアに向けて南下。シエラネバダの雪山を横に見乍ら超スピードで直走る、風車やビニールハウスが飛ぶ様に過ぎていき、Cabo de Gata (あるめのう岬) 近くの湖で、ミゲル夫妻と落ち合う。

ミゲル氏の別荘でトイレ休憩、湖でフラミンゴ



見学の後、めのう岬へ……。澄んだ海水は一際美しい、同行の女性たちも晴れやか。ミゲル氏いきつけの海辺のレストランで最高の海鮮料理……。車中で一眠りの間にホテル着。ベランダからの眺めに、思わず絶句！最上階の6階、ベランダが付いており、直下を見るとプールが、そして眼前には青々とした地中海が見え、午後9時を過ぎているのに陽が射している！PANA EL MORATO へフラメンコを見に！ 此処は会員制のクラブで、吉川氏を含めて世界的な音楽家が来るとか、ギター館時代に呼んだ事のある、ドイツのウルフィ



ン・リースケ(トールレスを弾くので有名)も度々来るらしい。カンテ・踊り・ギターのフラメンコを堪能……。

次回に続く



【特別企画】

打田昇三の平家物語

巻第十一 (三・二)

藤戸(ふじと)のこと

悲壮な、と言うか、気の毒な、と言うべきか平家の行く末に絶望して自ら海の藻葛と消えた平維盛のことを聞いた鎌倉の頼朝は「ああ、気の毒な事をした。維盛殿が蟬り(わだかまり)を捨てて源氏に身を寄せてくれたならば、命は助けて差し上げたものを……私は、維盛殿の父である小松内府(こまつのだいふ)内大臣・平重盛)の事は疎かに思っていないかった。私が助かったのは池の善尼の使いとして清

盛に「頼朝少年の助命」を進言してくれた重盛公のお蔭だと思っている。其の恩は忘れられないから(重盛公の)御子息たちを疎かには思っていない。まして維盛殿が出家された身ならば尚更に問題など無かったのに……」と言った。

此処までは前章段の補足記事のようなものであり、是からが題名の「藤戸」に関わる話になってくる。「藤戸」とは、船舶を利用して守る平家軍を攻める源範頼の軍勢が苦勞をする中で、佐々木盛綱が目覚ましい活躍をする。その場所が「藤戸」なのである。現在の倉敷市南東部になる。

平家は讃岐国屋島を本拠地としていたのだが、東国から数万騎の源氏軍が都に入ったと言う情報を得た上に、九州からも豊後(大分)の臼杵(緒方)と同族の戸次、松浦党などが押し寄せて来るという噂も耳にした。其らの情報、どの程度信用できるか分からないけれども、事実とすれば両面に敵を受けることになる。其れで無くても一の谷の敗戦で多くの兵を失っている。平家一門は恐れ戦くばかり無かった。

其処に、四国から阿波国の豪族で昔から平家に仕えて居た本姓が名門・紀氏の阿波民部大夫重能兄弟が四国の軍勢を集めてやって来た。別に根拠があった訳では無いと思うが、重能が「何とかなるでしょう!」と言ったので一旦は戦意を失った平家の面々も、其の言葉を信じて空元氣を取り戻した。しかし女房達は先が読めたらしく、寄り集まって泣くばかりであった。寿永三年七月二十五日には平家が都落ちしてから一年になり「去年の今日は都を出たのだが、早くも一年が経ってしまった……」と無駄な回顧をしてみても戻れる見込みは全く無いのである。

同年七月二十八日には新帝(後鳥羽天皇)の即位があった……と原本に書いて有るが、実際には巻「第

八・名虎」に記載されたように後鳥羽天皇は前年の八月二十日に即位している。此の場合、皇位の象徴である三種の神器を平家に抑えられたままの即位であるから、何年経っても何回、記録されても本物扱いはされず三種の神器が無い即位の例は神武天皇以来八十二代、是が初めてである。

八月六日には除目(じもく)叙位叙勲)が行われて蒲冠者源範頼が参河守になり、九郎冠者義経は左衛門尉に任命された。此の際に後白河法皇の策で、本来は官符だけで済む任命手続きに法皇の使者が行う検非違使任命が加えられたので源義経は「九郎判官(くろうぼうがん)」と呼ばれる。問題は其の人事が鎌倉の頼朝に相談無く行われたことであり、後に義経は失脚することになる。

そのうちに、昔、円融天皇時代に一条摂政と呼ばれた藤原伊尹(ふじわらのこれた)の屋敷で開かれた連歌の席で藤原義孝が詠んだ歌に有る「萩のうわ風・萩の下露」の季節となり、秋の到来を恨む虫の声が悲しく聞こえ、木の葉が落ちる景色に物を思うも淋しい季節になった。浮き草のような暮らしの平家の人々の心中は如何であろうと推察するのも哀れである。昔は九重の雲の上で春の花を愛で、今は屋島の浦で秋の月を悲しむ。

名月を詠じても都の空を思いやり、心を澄まし涙を流して暮らす日々を送っている。歌人として知られた左馬頭行盛(平清盛の次男・基盛の子)は、その思いを歌に詠んだ。

君住めばこれも雲井の月なれど

なお恋しきは都なりけり

場面は源氏方に転換して、寿永三年九月十二日、参河守範頼が平家追討のために西国へ向かった。従う人々は足利藏人義兼、加賀見小次郎長清(甲斐源氏)、北条小四郎義時(頼朝夫人・政子の弟)斎院次

官親義（藤原氏）、侍大將は土肥次郎実平、其の子・弥太郎遠平、三浦介義澄（桓武平氏）、其の子・平六義村、畠山庄司次郎重忠（桓武平氏）、同長野三郎重清、稻毛三郎重成（桓武平氏）、椿谷（はんがいの）四郎重朝（稻毛系）、同長沼五郎宗清、土屋三郎宗遠（土肥次郎の弟）、佐々木三郎盛綱、八田四郎武者朝家（後に筑波山麓に拠る小田氏の祖）、安西三郎量益、大胡三郎実秋、天野藤内遠景（工藤一族）、比企藤内朝宗（伊豆流人時代の頼朝を助けた比企乳母の一族か）、同藤四郎義員、中条藤次家長（八田系）、一品房章玄、土佐坊正俊以下三万余騎の軍勢である。

是を迎え討つ平家軍は少し景気が悪くて、大將軍は小松新三位中将資盛、同少将有盛、丹後侍従忠房（いずれも重盛の子である）、侍大將には飛騨三郎左衛門景経、越中次郎兵衛盛次、上総五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清など、大軍を率いるよりも一騎打ちで戦うほうが得意なようなメンバーが、五百余艘の船に乗って備前国の小島に着いた。

なお「日本外史」では平家軍の指揮官が平行盛（清盛の次男・基盛の子）になっているが、平家が負けたのであるから誰でも良い。兎に角、西征した源氏軍は平家の動向を知って備前国藤戸に陣を進めた。現在の岡山県倉敷市児島で、当時は半島であったらしい。源平両軍は沿岸部で海上約三千メートル程の間隔を置いて対峙したらしい。

合戦は両軍が衝突して始まるものであり平家が海上に居て源氏が陸に居たのでは話にならない。船の無い源氏軍は近くの山に陣を布いて数日間を過ごした。平家も其の場に船を浮かべて居るだけで攻撃も出来ない。どちらかが退けば合戦は起こらないのだが：それも出来ない。その中に平家側から血気に逸る若者が小船を出して源氏軍を徴発した。馬鹿に

されても源氏軍は何も出来ない。

そうした中で、九月二十五日の夜に源氏方の佐々木三郎盛綱が地元の漁師らしい男を探し出してきた。盛綱は此の男に貴族用の衣装や銀細工を施した短刀などを与えてから、さり気なく「此の海を馬で越えられるような場所があるか？」と質問をした。見た目にも高級な品物を貰った男は自慢する様に「浦に暮らす漁師は多いが、海の通路を知っている者は稀です。細部まで知っているのは私ぐらいでしょう：例えば河の瀬のような場所があり、それが月初めには東に移り、月末には西に変わります。両方の瀬の間は海上で二百メートル程です。其処ならば馬でも容易に渡ることが出来ます」と答えた。盛綱は内心で喜び、源氏の武士はもとより自分の家臣にも知らせず日が暮れてから男と二人で現場の確認に出かけた。

現場の海は男の言うとおりの深い場所が少なく多くは膝か腰までで肩まで水に浸かる場所も髪が濡れる程度である。深い部分も泳いで浅瀬に着く。

案内の男は「是から南は北よりも浅い場所ですが敵が矢先を揃えて待つ所に裸で行くのは危険でしょう。戻ってください」と言った。盛綱も言われる俚に戻ったのだが「この男は漁師以上のことを知り過ぎている。他の者に頼まれて案内をしたり平家方に内通されては困る！」と思い、海路の秘密は自分だけが知って置く」と、海に詳しい男を殺害してしまった。

九月二十六日の午前九時頃になると、平家の陣営から小船が漕ぎ出て来て親切に「此処を渡って攻めて来い！」と誘ってくれた。余計な事をしなくても攻めて行くのに：佐々木三郎は自分で調査済みであるから、しぼり染めの直垂に黒糸で編み込んだ鎧を着て白色系統の馬に乗り家臣ら七騎で海中の通路

を進んで行った。是に気が付いた源氏の大將軍・参河守範頼が、事情を知らないから海を渡る暴挙に慌てて「あの者を止めよ！制せよ」と命じた。侍大將の土肥次郎実平が馬を疾走させて追い付き、「佐々木殿留まれよ！狂われたか、大將軍の御命令も無いのに無謀な行動はならぬ」と叫んだ。しかし佐々木は聞こえない振りをして海中を進んで行く。仕方が無いので土肥実平も佐々木の進む海路を行き、海中であるから馬も胸先から鞍の辺りまで水に浸かりながら、深い場所は泳がせて、平家軍が陣取る対岸に一緒に着いてしまった。此の様子は源氏軍から良く見える。

大將軍・参河守範頼は「：佐々木に囚われた！此の海は浅かったのだ：全軍で渡せ！」と命じたので三万余の軍勢が一気に攻め寄せて来た。驚いたのは源氏だけでは無い。平家方も、船を持たない源氏軍が、まさか海を越えて攻め寄せるとは思っても居ない。小船を前面に出して障害物としながら一斉射撃で應戦した。源氏の軍勢も怯（ひる）まずに兜を目深にして顔面を防御しつつ平家の船に乗り移って戦った。源平両軍が乱戦となり船が転覆したり、沈没して死ぬ者も有った。

合戦は一日中、続いて両軍共に疲れた。平家は残った船を沖に移動させ、源氏は平家の居た小島に留まって両軍共に人馬を休ませた。やがて平家は屋島へ退いて行ったのだが、船が無い源氏軍は気持ちが悪くても沖には行けず追撃は出来ない。

合戦の状況は鎌倉に知らされ、頼朝は「昔から河川を馬で渡す武士は居たが、馬で海を渡した事例は異国でも聞かない。我が国でも極めて稀な先例になった」として備前の小島を佐々木盛綱に与えた。是は頼朝の命令として記録されている。

大嘗会之沙汰（だいじょうえのさた）のこと

原本に依つては「藤戸」の後に此の項目が無くて「高野御幸（こうやごこう）」が入っている。

後白河法皇の祖父・白河法皇が生身の如來から説法を聞くために天竺（印度）へ渡ろうとするのだが、是を知った学者の大江匡房（毛利氏の祖）が弘法大師の話をして止めさせ、代わりに高野山へ行かせた……という話である。高野山ならば安く上がるがインド行きは莫大な費用が掛かる。

「藤戸」でも出てきたが、寿永三年（元暦元年）九月二十七日、京の都では源九郎義経が検非違使五位尉に任命されて「九郎大夫判官（くろうたいふのほうがん）」と呼ばれるようになった。当時の官僚は中央・地方・組織の大小に関係なく大寶令で決められた四部官（長官、次官、判官、主典）に区分されていて衛門府・兵衛府・檢非違使の三官庁で監察官の様な職務を執る者が判官職であり常陸国府などでは「大掾（だいじょう）」が判官職である。問題なのは義経の人事が後白河法皇の独断でなされたことで鎌倉に居る源頼朝は相談されて居ないと思われる。その為に義経は頼朝に睨まれて失脚することになるのである。

その中に十月に入った。屋島の方では浜辺に吹き寄せる風も激しさを増し、打ち寄せる波も次第に高くなっていた。其の所為かどうか商人の船も寄りつかず都の消息も伝わらず、曇り空に霰（あられ）が降る日もあって、世間から取り残されたように何とも心細い日々が続いていた。

その様な平家の事情など関係無く、都では大嘗会（天皇が即位後に初めて新米を食べるといふ、どうでも良い様な儀式）が行われるので、それに先立って賀茂川で身を清めると言う寒い儀式が行われた。

大嘗会を執行する責任者を命じられたのは徳大寺左大将藤原実定公（当時は内大臣＝平家物語・巻第一・二代后・藤原多子の兄）である。

寿永元年に安徳天皇が此の行事を行った時には平家全盛時代で内大臣の平宗盛公が此の役目を担当していた。それを思い出してみると（思い出しても仕方が無いが）儀式の仮屋に着き、前に龍の旗を立てて居られた様子は優雅で有った。平家一門は三位中将知盛、頭中将重衡以下、近衛府に仕える全員が天皇の周りに整理の綱を張っていた。平家没落の今は、当たり前だが誰も居ない。

此の度は源氏の九郎義経が天皇行列の先頭に立っていたが、木曾義仲に比べると少しは都風が感じられて増しながら、平家に比べれば問題にならないほど優雅さに欠けていた。去る治承・養和の頃から諸国七道（東海・東山・北陸・山陽・山陰・南海・西海）の住民・農民漁民は源氏に悩まされ、平家に滅ぼされ、家や家財を捨てて山野に隠れ、春でも耕作が出来ず、秋でも収穫が叶わず苦しみ抜いて居る現状では大嘗会などと言うどうでも良い儀式を行える状態では無いのに政府は中止も出来ないため予定どおりに実施した。

ここで唐突にも此の後の文は前の章段の場面に戻る。藤戸の合戦で平家軍を追い落とした参河守範頼の軍勢が引き続いて攻め込んで行けば平家は滅んだ筈だが、室（むろ＝兵庫御津）や高砂で休息を取り、地元の遊郭で遊女を集めて遊び戯れる日を送ってしまった。是は国家予算の無駄使いであり、国民が犠牲になる行為なので東国的大小名たちも「是で良いのか？」と思いながら大將軍の指示であるから楽なほうを選んだ。国民にとっては碌な事が無く、其の年も暮れていった。

（巻第十・終）

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

これにて 会報第 94 号（2014 年 3 月）より 5 年半にわたって掲載してきました打田升三の「私本平家物語」は完結となります。次号よりいよいよ打田昇三の将門記の連載を掲載します。お楽しみに！